済生会今治病院
病気の話

病理診断について ～顕微鏡で「がん」の確定診断～

今回は病理診断科の病理専門医、坂東健次医師に顕微鏡で「がん」の確定診断について伺いました。

▲坂東 健次医師

病理診断科では、患者さんの体から採取された細胞や組織を顕微鏡で見て、病気の診断をします。特に「がん」の診断が重要な役割で、多くの場合、病理診断が最終的な確定診断となります。

医師（病理専門医、細胞診専門医）と臨床検査技師（細胞検査士）が協力して、標本作製や診断をします。細胞や組織に様々な処理をした後、スライドガラスに貼り付け、赤や青、緑などの染色液で色付けします。がん細胞を顕微鏡で観察すると、正常な細胞より大きい、形がいびつ、密度が高い、配列が不規則、などの異常が見られます。

「がん」か否か、に加えて、がんの種類の特定も重要です。臓器別の「肺がん」、「胃がん」などの大まかな分類とは別に、細胞の形や性質などの特徴を基にした「組織型」という細かい分類があります。例えば肺がんでは「腺がん」、「扁平上皮がん」、「小細胞がん」などの組織型があります。さらに、手術でがん全体が切除される場合は、がんの広がり具合も診断します。必要に応じて手術中にも病理診断（術中迅速診断）をしており、手術の精度向上に貢献しています。組織型や広がり具合によって治療方針が変わるため、病理診断はがん診療に欠かせません。

また、近年ではがん細胞の遺伝子を調べて、より効果的な治療薬を選択できるようになってきましたが、遺伝子検査には病理診断で「がん」と確定した細胞や組織が活用されており、病理診断は今後ますます重要になると思われます。

社会福祉法人
恩賜財団 済生会今治病院
今治市喜田村7丁目1番6号
https://www.imabari.saiseikai.or.jp/
☎0898-47-2500